

万葉博物学者小林義兄について

和田 義 一*

A Study of a Naturalist Yoshie Kobayashi

Yoshikazu Wada

Yoshie Kobayashi(1743-1821) was born in the fiefdom of Hikone at the Edo period. In his youth he studied Japanese poetry and Kokugaku, of which word means the study of Japanese classical literature. In middle years of his life he was entrusted the investigation of fishes in Lake Biwa by the feudal lord Naonaka Ii and he wrote the report on that investigation. In his later years he wrote the report on the historical ecological life of bird animal insect fishes grass and trees, those which was included in Manyoushu. When he wrote these books, he used to reference Honzoukoumoku which had description of animals and plants, imported from China at 17 century.

はじめに

わが国で本草学が盛んになるのは江戸時代に入ってからである。慶長十二年(1607)に、明の李時珍著『本草綱目』が輸入された。慶長十七年には、幕府御用学者林道春(羅山)が、それを抜写して『多識編』五巻を作ったりしているが、寛永十四年(1637)に、民間人の手によって『本草綱目』の最初の和刻本(日本版本)が刊行されてからは、わが国の本草学はこの『本草綱目』を中心に発展していった。やがて、日本人自身の手になる本草書も著述・刊行されるようになった。貝原篤信(益軒)『大和本草』(宝永六年(1709)刊)、稲生若水『庶物類纂』(天明三年(1783)成立)、小野蘭山『本草綱目啓蒙』(享和三年(1803)~文化三年(1806)刊行)などがその代表的なものである。本草学発展の背景には、八代将軍吉宗時代に最も顕著に見られる、幕府の学問奨励、実学尊重、物産振興の政策路線もあった。

こうした本草学研究の盛況に刺激されて、万葉集研究にも新しい研究法が生まれた。万葉集所載の動物・植物を鳥・獣・虫・魚・貝・草・木に分類し、本草学的知識を基盤にして考証する研究法である。これを仮に万葉博物学と呼んでおく。

「博物之学」という語の使用は、貝原益軒(『大和本草』)が最初である。江戸時代の本草学は、後期には本草学・名物学・物産学へと分科し、それぞれ独自に発展していくが、益軒はこの語を本草学・名物学・物産学の総名として使用した。そのことを、日本博物学史研究の草分け的存在であった白井光太郎(文久三年(1863)~昭和七年(1932))は「先生ノ時代ニハ今日ノ所謂博物学ト云フモノハナカッタノデアリマス。今日ノ博物学トハ先生ノ時代ノ博物学ト違ッテ居ル。其ノ代リニ、本草学、名物学、物産学ト云フ此ノ三ツノ科目ガアッタ。其ノ三ツヲ合シタモノヲ先ヅ博物学ト云フタノデアル」(白井光太郎考注『大和本草』(昭和50年復刻版有明書房)序文「博物学者トシテノ貝原益軒」)と述べている。

* 教養部

益軒の「博物之学」は、本草学・名物学・物産学の総名としてであったが、彼の関心は、それらの学の実用的・功利的側面より、宇宙や自然界に存在する品物（ひんぶつ）の客観的認識により多く向けられていたようだ。益軒は「論本草書」の中で「究其品物、通其性理、考其是非・・・弁其同異而、極廣博、到精密」（引用は白井光太郎考注『大和本草』卷之一「論本草書」による。返点は略。）と述べているからである。その点で、益軒の「博物之学」は『名』についてその表わす実体を正しくつきとめる学（講座国語史3『語彙史』（昭和43年大修館）第五章「近代の語彙Ⅱ」の「学術用語」（島田勇雄））と定義される「名物学」に近接しているかもしれない。しかし、「博物之学」は即「名物学」でないこと無論である。そして、筆写が「万葉博物学」という場合の「博物学」も益軒の「博物之学」の意味で使用している。

万葉集中の鳥獣虫魚草木を分類することは、すでに契沖が『万葉代匠記』（精撰本）（元禄二年（1689）から同三年にかけて完成）の「惣釈」篇で行っている。そこでは動物・植物に分類し、イロハ順に配列している。しかし、「鳥獣虫魚」は約六十項目、「草木」は約百六十項目を挙げているものの、大部分が名称の列举と集中所載の巻丁数の記載にとどまっている。契沖に続く賀茂真淵の『冠辞考』（宝暦七年（1757）成立）や『万葉考』（卷一・二、同別記、成立は宝暦十年）なども動植物の考証はかなり精細になされているが、本草学的知識の導入という点では皆無に近い。

江戸後期の文化・文政期に入ってから、本草学的知識を活用して、万葉集中の鳥獣虫魚草木を考証する述作や冊子の編纂が本格化する。万葉博物学書の中で、最も年代が早いのは小林義兄『万葉集禽獣蟲魚草木考』（文化十二年（1815）自序）である。同時期に成立したと考えられるものに、伊藤多羅『万葉動植考』がある。ついで、春登『万葉集名物考』（文政六年（1823）自序）、荒木田嗣興『万葉品類鈔』（文政十年（1827）自序）、鹿持雅澄『万葉集品物解』（文政十年初稿本成立）などがある。さらに、西門蘭溪『万葉草木考』（天保十二年（1841）自序）、高橋残夢『万葉物名考』（弘化三年（1846）識語）などがある。無年記のものには、著者不明『万葉集名物考』（大阪府立図書館蔵）、著者不明・亀井高山画『万葉集草木考』（大阪府立図書館蔵）、千村仲雄『万葉集類聚抄』（お茶の水図書館蔵）などがある。

この小論では上に書名を挙げた万葉博物学書のうち、年代の最も早い小林義兄『万葉集禽獣蟲魚草木考』について、著者小林義兄の生涯と著書の成立過程とを中心に述べたい。

1、小林義兄の生涯

小林義兄（よしえ）は『国書人名辞典』（第二卷）によれば、寛保三年（1743）生、文政四年（1821）、七十九歳で歿。墓は彦根市大雲寺（彦根市河原一丁目一ノ四一）にある。本姓藤原、名は義兄、通称は左内・村治（連）と称した。近江彦根の人で、彦根藩士印具氏の家臣、藩主井伊直中の命により、琵琶湖の魚介を調査した。大菅中養父に国学を学び、海量・橋本経亮・藤井高直と親交があった、とある。『近江人物志』（滋賀県教育会編大正六年刊）には「藩主直中、藩の歩行戸田次郎右衛門及び義兄に命じ、費を給し、普く湖川

谿澗の魚蟲を歴観せしめ、漁人に就いて探問訊究し、現物を見てその形容を図写し、以て湖魚の状況を述作せしむ。義兄湖魚考二巻を撰びて之を呈せり」とある。

義兄と終生親交があったのは十歳年上の僧海量(寛保十八年(1733)～文化十四年(1817))であった。海量については森銑三「海量法師」(『森銑三著作集』第二巻人物編二(1988 中央公論社) 収載) が詳しい。海量は近江国犬上郡開出今村の真宗覚勝寺第八代玄明の五男として生まれた。母は彦根藩士高野瀬某の女という。十歳前後に母に死別したようだが、二十歳代には中務と称していたから、まだ俗体であったようだ。明和二年(1765)、三十三歳の秋、彦根城東方の里根村桜谷の草庵に住むが、一所不住の旅を好み、以後諸国を巡り、多くの知名人士と交流する。「海量法師」には義兄関連記事もあるので、それらを参考に義兄の生涯について述べてみる。

海量は明和三年(1765)江戸に下り、八月に加藤枝直、賀茂真淵を訪問している。真淵門下のように言われているが、束脩を呈しての正規の入門者ではなかった(小山正『賀茂真淵伝』「増補県居門人録」(昭和13年春秋社))。明和六年の真淵歿後、海量は加藤枝直に親近する。加藤枝直日記の明和八年五月二日の条には「彦根海龍法師歌数々添削を乞一封」(引用は「海量法師」による。以下同じ)とある。つづいて十二月二十日の条には「彦根海龍より八十賀詩歌并小林儀婦長歌贈」とある。「儀婦」義兄のことである。この年枝直は八十歳、義兄は二十七歳である。面識のない義兄は海量に便乗したのである。

安永二年(1773)の枝直日記、十月七日の条には「彦根之海量より状、歌六十二首、外に小林村治(傍書。義兄)と云者、海量迄見せ候と云歌学之理くつを書たる一通など来。……小林村治何人にや」とある。同十月二十六日状には「貞温へ返書鎮忠迄遣。小林村治と云者より貞温へ詞書歌贈候とて写みせ候て海量門人にやと申越に付、此方越候長文之内に大菅翁中養父が申たるなど申越候間、大菅が弟子にて可有之段申遣。大菅中養父と申は先年龍彦二郎より状添、扇子箱持逢に来る者也。彦根の家老の家来之由。其事も貞温へ申遣」とある。枝直から音信の得られない義兄は別人を通じて返信を待ったが空しかったようだ。

安永三年には義兄は江戸に滞在していた。同日記五月二十三日の条には「彦根之小林村治義、海量よりの書状持参逢度旨申込候へ共、龍彦次郎より先達委細申越候故、得客候由申、不対面帰ス」とある。同二十七日の条には「海量へ返事認置。村治又可参候間渡可申候。村治へ逢不申事申遣」とある。海量に対して、義兄に会わないことの諒解を求めている。同七月二十一日条には「小林村治来。又可参由申置候。勤番にて来年迄居候と申候由。海量書面とは違候。彦根家来之陪臣にて可有之」とある。再三の来訪にもかかわらず枝直は面会に応じなかった。森銑三は「一徹な枝直は、つひに小林義兄に対しては好感を持たなかったらしい」(同書116頁)と述べている。郷里の先学大菅中養父が「状添(え)、扇子箱持(ち)逢(ひ)に来る」のと対比すれば、義兄の態度は、真淵歿後の県門の大家にとって、傲慢で失礼な若者と見えたのであろう。江戸町奉行所の与力・吟味方を勤めたかつての直参と彦根家来之陪臣との間に存する身分的な懸隔も背景にはあったであろう。

枝直に面会かなわなかった義兄は其後県居門下の国学者と交流を深める。枝直日記によ

れば義兄は勤番で安永三年・四年と在府した。安永五年（1776）七月に、義兄は真淵所蔵自筆書入本の『東遊歌曲・神楽歌・風俗歌曲・催馬楽歌曲』を書写した（現筑波大学所蔵本）。識語には「右東遊哥風俗哥者賀茂懸主所蔵自筆書入之本也 安永五年丙申七月三日写之 小林連義兄」とある。内題および掲載順は「東遊歌・神楽歌曲・催馬楽譜・風俗歌」である。東遊歌・神楽歌曲・催馬楽譜・風俗歌の「四譜」を一括するテキストとしては、小山田（高田）与清『楽章類語鈔』（文政二（1819）年刊）が著名であるが、その附言によれば、小林義兄の筆になる真淵自筆書入れ本の写本（筑波大学本）を対校本として用いたという。『楽章類語鈔』は与清の師村田春海が、明和九年（1772）に写得した古譜本を底本とし、五種十一本の対校を行ったものである。その対校本の一本が義兄書写本であるというのである。本書について与清は「風俗歌の左に、朱墨もて草仮名に訳文書れたり、また鳴鳳集の催馬楽同音楽の名、和名鈔の説など書ついたり、こは義兄がしわざにやありけん、此本大かたよろしけれど、織錦大人（春海）の伝本にくらぶればものならず」（高野辰之『日本歌謡集成』2）と述べる。

義兄が真淵所蔵自筆書入本をどのような経路で貸与されたのか不明である。海量の『五百いほつどひ集』（天明四年（1784）編著）の序文に、「義兄東にくだりて真淵大人のをしへをつたへたる人々にまじらひ、わたつみのもたる白玉なすえがたきふみどもをさぐりてもちかへれりしを」と述べられているのは、真淵書入れ本などを写得したり、貴重書を持ち帰ったりしたことを漠然と回想しているというのであろう。

ところで、義兄の写本（筑波大学本）には本文とは別筆で「濱按」とある頭注が約二十個所ある。これは春海の門人清水濱臣（安永五年（1776）～文政七年（1824））の手になるものと考えられる。義兄の写本は清水濱臣の手に渡ったのである。丸山季夫『泊泊舎年譜』（昭和39年私家版）によれば、濱臣は享和二（1802）年五月には義兄の写本により、真淵書入れの古本催馬楽譜を書写している（現天理図書館所蔵という）。義兄の写本は濱臣から、さらに同じ春海門下の小山田与清の手に渡った。濱臣と与清とは文化十一年に確執があり、絶交状態にあったが、文政元年ごろには、交友は旧に復していたのである。

義兄は五十一歳の寛政五年（1793）、京に滞在していた。井上通泰が『帝国文学』第六巻一号（明治三十三年）に発表された「藤井高尚の消息」の一節には義兄のことを「近江の人也。京六角池の坊に客居。浪人にやと見え申候。私帰郷の節、此男も江州へひき申候。此男万葉家也。歌文章ともに古体を好みて経亮と交厚し。私も心やすくなり万葉をあしこここよみ合見申候処よほどねれ候ものにて面白事御座候。才子にてはなく老功也。」（引用は井上通泰『南天莊雜筆』（昭和五年春陽堂）による。）と述べている。「才子にてはなく老功也。」とは、当時三十歳、上京中の藤井高尚（明和元年（1764）～天保十一年（1840））が五十一歳の義兄に対する印象である。この消息の通りならば、義兄は当時仕官していなかった。そして、この年に近江へ引き上げた。それから十三年後の文化三年（1806）には、彦根藩主井伊直中の命による、琵琶湖の魚介類の調査記録『湖魚考』二巻を書き上げている。義兄六十四歳のときである。

彦根藩第十一代の藩主井伊直中（寛政元年（1789）～文化九年（1812）在職）は就任するとすぐ諸事倏約令を出すなど藩財政の建て直しはかり、藩政改革に積極的に取り組んだ。寛政十一年（1799）には国産方を設け、国産奨励政策を行った。一方寛政六年（1794）には藩校稽古館の設立を計画し、海量らに諸国の藩校を視察させ、特に毛利家の明倫館、細川家の時習館を範として設立することを決定した。藩校は寛政九年に起工し、同十一年に完成した。また、海量が諸国の典籍の蒐集に努めたのは藩文庫（石崎文庫）設立の計画があったからである（結局未完成に終わったが）。こうした状況下に『湖魚考』は成立したのである。

既述のように、藩主直中は「藩の歩行戸田次郎右衛門及び義兄に命じ、費を給し、普く湖川谿澗の魚蟲を歴観せしめ、漁人に就いて探問訊究」（『近江人物志』）させた。『近江彦根市志』などには、義兄は彦根藩士印具氏の陪臣とあるが、印具氏は直仲の家臣印具徳右衛門のことである。この時義兄は印具氏の陪臣待遇で命を受けたのであろうか。同行の戸田次郎右衛門の身分が藩の歩行（足輕）であるから、義兄もそれに相当する身分であったろう。

2、『湖魚考』について

『湖魚考』は上・下二巻で構成され、記載項目は上巻二〇品目、下巻三八品目である。最初に序文があり、年記は「文化の三つ年の霜月のもちの頃」とある。写本は十余種類あるが、披見しえたのは東京国立博物館本（帝室和本9 3 6）、岩瀬文庫二冊本（2035・17-60）、同一冊本（2034・18-28）、杏雨書屋二冊本（旧杏・1373）、同（旧杏・3151）、同乾々齋文庫本（乾・1386）である。その他国会図書館、内閣文庫、史料館、東大図書館、東北大図書館などに所蔵されている。以下、東京博物館本により概況を述べる。

序文の初めに、「国つ君よろづの事をきこしをす余り、百伝ふ八十の浦々に住ものに、魚のありのことごととらへ、其形をうつさしめて一卷となしまし、是に其考を書てたてまつれよとの仰を蒙りてける。」（翻刻は筆者。以下同。）と述べ、君命を受けたについては、「抑此魚の事は早くより村肝の心にかけて、水の上を床とすなどりくらふおくの島人にもとひ、八重しく波の上に船うけて釣する堅田の浦人にも尋て、ほのほの聞、疑はしきはふるき文もてたゞさまくおもふをりから、此仰ごとを蒙ること、海のさちえたらむ如くよろこびまつり」と、義兄には早くから博物学的関心があったことを述べている。調査の範囲および対象については「湖にみをひく奥山のみなきる谷川、さゞ波たつ入江、みくさ生ふ池などに、鰭ふり遊ぶいさな、おきつ藻に住（む）くさぐさの虫、いははしのもとを家と住（む）水鼠、水深きところに隠れ住（む）川をそまでも考そへ、凡其数なゝそじばかり、その品もゝ余りなるを、波うちよするへつ藻のかき集て湖魚考と名附て奉りける」と述べている。その種類は七十品目、百余種というのが義兄の計算であるが、実際は五十八品目、同一物の異名をも含めて九十七種が挙げられている。魚介のみならず「まひまひむし」、「げむごろむし」、「あたむちよう」、「うをとりむし」、「ぼうふりむし」、「ひる」などの虫類や「みもり」、「かへる」、「みづねづみ」、「かはをそ」などの水棲動物にまで及んでいる。

序文につづく付記、「附ていふ」には「此考は文字の上にての論はおきて、たゞ世につか

ひなれこしまゝにて書し也」と述べ、古くから該当品種に当ててきた漢字は、本草書や辞書類と照合すると他品種のことになるが、それらは「古く御国につかひなれしに従ひて改めず。其外も少しづゝ違ふことあれど改めぬ也」「今の俗のいへるのみを名とす」と述べている。また、「異国に沙汰もなき小魚どもは今の俗のいへるのみを名とす。異国の書に当るやうにて当らぬもあれば文字はいれず」とも述べている。そして、「薬用功能」のことは本草書類に「まちまちに異に論じてあれば、いづれをいづれと心えしられねばいはず」と述べている。

本文の記事は初めに形態や生態を述べ、ついで生息地や漁獲方法、調理方法などを述べる。調査方法は、主として土着の漁人からの聞き取りによっている。「文字の書さま人の早くきこゆるを元として、今の俗文の如く正字又音訓をまじへて、玉あへる友どちと物かたらふ如くに書たり」という。所謂漢文体ではなく、和文体で、聞きとったまゝを記述するという形式をとっている。聞き取り記事の最後に、「諸説」として、本草書や字書・辞典類、日本の古典類の該当箇所が原文（漢文）のまま引用されている。最も引用頻度数の高いものは本草綱目（30回）であるが、それについて倭名抄（24回）や大和本草（15回）が多い。和漢三才図絵、本朝食鑑、日本書紀なども数回引用されている。この「諸説」の存在は「序文」とその付記で述べていることと背馳する。果たして本書成立当初からあったのか疑問である。

東博本の『湖魚考』には、「諸説」とは別に、「世孺按（案）」とする細字の注記が二箇所ある。世孺とは山本亡羊のことである。山本亡羊（安永七年（1778）～安政六年（1859））は小野蘭山の弟子で、寛政十一年（1799）に蘭山が幕命により江戸に移住してからは京都本草学界の中心となった人物である。既述のように西尾市立図書館岩瀬文庫には二種類の『湖魚考』が蔵されている。一冊本の本文の冒頭には朱筆で「平安亡羊山世孺 校正」とあり、巻末には同じく朱筆で「嘉永元年戊申之冬十一月 応万里帆足先生之求膳写併録家君之所旁記而遺之 平安山本錫夫」とある。この写本は山本亡羊が校正したものを嗣子の山本錫夫が父亡羊の注記ともども筆写したというのである。本書には朱筆による「按（案）」とある注記が五箇所ある。うち二箇所は東博本と同じ内容であるから、他の三箇所は追加されたものである。五箇所の「按（案）」には「世孺」の語は省かれている。これに対して、二冊本は「読書室蔵」の専用野紙に書写されていて、筆者名・年記はない。東博本にある注記は東博本と同じように「世孺按（案）」として注記されている。東博本にない他の三箇所のうち、一箇所は「世孺按（案）」と書かれて注記の形をとっているが、他の二箇所は本文のなかに入り込んでいる。

一冊本は江戸時代の儒学者帆足万里（安永七年（1778）～嘉永五年（1852））の求めに応じたものだけに、義兄の説と世孺の説とを厳密に区別している。二冊本は読書室に家蔵する草稿に類するものとはいえ、注が本文化するなど、本文と注の区別がそれほど厳密ではない。岩瀬本は形式面でも、品物の漢名を本文の上欄に記載するなど、東博本とは異なる。言い換えれば、写得した人の手で整理がなされているということである。こうしたことを

考慮すると、東博本に「諸説」として引用されている本草書や字書・事典類の記事は、果たして原本にあったものか疑問に思われる。

3、『万葉集禽獣蟲魚草木考』について

『万葉集禽獣蟲魚草木考』は小林義兄が万葉集所載の禽獣虫魚草木について考証した書である。写本は管見では二種類（東北大学図書館蔵本・国会図書館蔵本）のみ、刊本では影印版（国会図書館蔵本の上巻）が『万葉集古注釈集成』近世編②の第十六卷（1991年日本図書センター）に収載されている。二種類の写本は次のようである。

1 東北大学図書館蔵狩野文庫本（第四門10476）（3冊本）

2 国立国会図書館蔵白井文庫本（特1-2054）（1冊合本）

1の末尾には「弘化二年乙巳八月写 平安榕室山錫夫」と識語があり、2の巻末には上の識語につづいて「大正三年一月 白井光蔵 数年前狩野亨吉氏ノ蔵本ヲ借受シテ写之」とある。「榕室山錫夫」とは山本亡羊の二男榕室山本錫夫のことである。1は榕室が弘化二年（1845）に書写したものであり、2は1を白井光太郎が大正三年に書写したものである。巻数・枚数、一面の行数、一行の字数まですべて同じように転写されている。各巻とも二三箇所の子句の異同はあるものの、ほぼ正確な転写本である。以下、1により写本の概略を述べる。

表紙は縦23,2cm、横16,2cm、左端上方に題簽が「万葉集禽獣蟲魚草木考」とある。内題は「万葉集中禽獣蟲魚草木考」とある。装丁は四つ目袋綴じ、用紙は上下に墨の界線があり、縦に罫線が入っている。一丁（表・裏とも）各十行の罫紙である。用紙の柱の下方に「読書室蔵」の印記がある。読書室は、山本亡羊の父封山が西本願寺から譲渡され、京油小路通り五条の自邸に移築した建物である。山本家の研究室・講義室であり、物産会の会場としても長く使用された。この罫紙は読書室専用のものであり、既述の岩瀬文庫本『湖魚考』（二冊本）にもこの用紙が使用されている。

丁数は第一冊が例言一枚、本文五十六枚、第二冊が本文七十六枚、第三冊本文四十八枚である。序文はなく、例言がそれに代わるものとしてある。例言の末尾に「文化十二年八月朔 小林忌寸義兄識」とあり、これによって、本書の成立を文化十二年（1815）とする。『湖魚考』の成立より九年が経過している。

構成は第一冊が卷一禽部、卷二獣部、卷三魚部、卷四虫類部、第二冊が卷五草部、第三冊が卷六木部となっている。標題は「禽獣蟲魚草木考」であるが、記載順は禽獣魚蟲草木となっている。動植物を六部に分類するのは当時の常識であった。卷一の鳥類に「禽部」という名称をあてているのは、本草綱目など中国渡来の本草書の名称を借りたのであろう。しかし、本草綱目の十六分類のうち、穀部・菜部を草部に含め、果部を木部に含めるのはよいとして、本草綱目の鱗部が龍・蛇・魚・無鱗魚の四部で構成されているのに対して、本書は魚類だけを取り出して魚部を設け、本草綱目の介部（亀鼈・蚌蛤）をも魚部に含めるなど、厳密に本草綱目の分類を踏襲しているわけではない。

本書には目録はない。「例言」に分類品目数が挙げられている。しかし、「例言」の挙げる

品目数と本文掲載の実際の品目数とは異なる。比較すると以下ようになる。() の数字は実際の品目数である。

鳥類	34品	(36)
毛物類	10品	(11)
魚類	24品	(20)
虫類	10品	(10)
草類	99品	(100)
木類	53品	(52)
合計	226品	(229)

「虫類」を除くと、いずれの項目も多少の増減がある。合計も例言には226品とあるが、例言の各項目の合計は230品であり、本文の記載品目の合計は229品目である。このような不一致は他書、例えば鹿持雅澄の『万葉集品物解』(文政十年稿本成立)などにも見られる。目録作成後に加筆・削除などを行うことにより項目の増減が生ずる。目録の訂正を何かの都合で控えれば、このような不一致となる。

本文の記載法は、まず万葉集(テキストは寛永版本)所載の品目名を抜き出し、その品目所載の巻・丁・面(表・裏)を記す。品目名の記載には「例言」でも述べているように、同一品目であれば、音仮名・訓仮名・正訓字・義訓字を問わず、「文字異ナルハコトゴトク」挙げる。その結果、「来鴨」「何時鴨」などの助詞表記の「鴨」や「物恋之伎」などの活用語尾と助動詞の表記である「之伎」(鴨)までも鳥名としてあげている。また、分類方法の点でも、巻三魚類に「鯨魚(いさな)」「河津(かはづ)」を入れ、巻四蟲類に「河爾(かに)」を入れるなど、今日から見れば不備な点も見える。

品目を書き出し、ついでその品目の考証がなされる。考証文の冒頭には「和名抄云」として『倭名抄』(寛永版本)の本文と「和名」を引用し、さらに、『本草綱目』の該当記事を引用することが多い。その他、本草学関係の諸書や契沖・真淵などの諸説なども引用されている。一方で、実際に山野湖沼を踏査し観察した記事や現地人からの聞き書きもある。

本草学関係の参考書として引用回数の最も多いのは『本草綱目』である。「例言」にも『本草』ト云シハ『本草綱目』也。外ニ本草類ノ書多シト云ヘドモ『綱目』ハ後ニテ諸書ヲ引テ委シケレバナリ」と述べている。ついで多いのは『知要』と『抄説』である。『知要』については「例言」に「『知要』ト云ハ去ル享保ノ頃、日子根人二三人集リテ『綱目』ヲヨミ考ヘテ書集メシヲ『本草知要』ト云。其中ヨリ取出タルヲ『知要』トノミ云ナリ」とある。義兄出生以前の享保年代(1716~1735)に、彦根にも『本草綱目』を研究するグループがあったようだ。『本草綱目』を解説し、和文の解説を付した書物類も多く出まわっていたのである。

『抄説』については「例言」に「『本草綱目』ヲ近キ頃小野蘭山考ヘシ諸書ヲ集メテ其肝要トスル所ヲ抜書シテ『抄説』ト云。是ヲ多トレリ」と述べている。小野蘭山(享保十四年(1729)~文化七年(1810))の本草学研究の集大成である『本草綱目啓蒙』初版本の刊

行は享和三年（1803）から文化三年（1806）にかけてである。しかも、それは「衆芳軒蔵」版の私家版であったから、蘭山の門弟以外が入手することは困難であった。ただ、蘭山の講義録は市中に出回っていたらしい。それら断片的な講義録は後人の手によって整理されて、『本草綱目紀聞』・『本草綱目会識』・『本草綱目訳説』などとして現存している。

蘭山の本草綱目の講義は巻次の順を追ってのものではなかったという（高橋達明「小野蘭山本草講義本編年攷」。『東アジアの本草と博物学の世界（下）』（1955年思文閣出版）所収）。本草綱目を三つの系列に分け、三系列が並列的に進められる。一系列は月に五回、三系列合わせて月に十五回のペースで進められた。一系列の講義は一年ないし二年かけて継続され、三系列全部を数年かけて、継続的に受講しなければ、本草綱目の系統だった内容理解が得られないようになっていた。このような講義方式の意図は「自己の学説のいたずらな拡散」の防衛にあった（同書）といわれる。当時の学問は開放的でなく、秘伝伝授的色彩がまだ色濃く残っていたようである。

このような状況から見て、義兄が『本草綱目啓蒙』を閲覧することはなく、義兄の参考にしたという「抄説」なるものも、体系的な形式・内容のものではなく、蘭山の学説の雑多な集成ではなかったかと推測されるのである。

『本草綱目』・『抄説』・『知要』の三書は、義兄が最も頻繁に使用した本草学関係の参考書である。それ以外の本草学関係では、貝原篤信（益軒）（『大和本草』）・松岡玄達（『用薬須知』）などの名が数回挙げられる程度である。

義兄自身の考察は『考』に示される。「『考』ト云ハ己義兄ガ云事ナリ」と「例言」で述べている。しかし、この『考』の記載は第二冊草部巻五の半ば、「なでしこ」の項までで、それ以後は『案』または『按』がそれにとって代わる。『案（按）』については「例言」に言及がない。例外的に『考』と『案』が併記されている項目（「わすれぐさ」）がある。このことは『考』と『案』がそれぞれ別人による考察であることを示唆する。つまり、『考』が義兄の説であるならば、『案（按）』は義兄以外の人の説ということになる。

岩瀬文庫本の『湖魚考』が榕室山本錫夫の手により書写され、それに注記「案（按）」があることは既述した。本書（狩野文庫本）もまた、巻末には「弘化二年乙巳八月写 平安榕室山錫夫」の識語があり、榕室山本錫夫（文化六年（1809）～元治元年（1864））の筆写によるものである。弘化二年（1845）は山本亡羊（安永七年（1778）～安政六年（1859））没後十四年が経過している。『禽獸蟲魚草木考』が成立した文化十二年から榕室が書写した弘化二年までは三十年が経過している。その間に本草学界は目ざましい発展を遂げている。亡羊・榕室父子は義兄よりも広汎な本草学の知識を持っていた。榕室が書写に際しての加筆・訂正はありえたであろう。本書の『案（按）』の記事は亡羊・榕室父子の説である可能性が高い。

また、『抄説』として引用されている蘭山の所説も、後半部に至ると、蘭山の『本草綱目啓蒙』の直接引用と考えられる箇所が多くなる。『啓蒙』の記事と全く合致するからである。その箇所は『案（按）』が頻出するのと並行している。義兄は『啓蒙』を閲覧していないは

ずだから、『啓蒙』の記事の直接引用は、やはり榕室によるものであろう。

榕室は多くの本草書を書写している。「読書室著書遺稿目録」(難波恒雄・遠藤正治編『百品考』(原著山本亡羊) 昭和58年科学書院刊 所収)によれば、榕室単独の写本は28部、138冊が挙げられている。亡羊校訂・榕室書写の本を加えればさらに多くなる。そもそも書写の目的は何であったのか。それは本草学関係の参考書を多く読書室に架蔵することにより、一門の学説を進展させることにあった。書籍の単なる蒐集が目的ではなく、利用することが目的であった。それが「読書室蔵」の用箋に書写されたことの意味である。書写に際しての加筆・訂正はむしろ当然であったかもしれない。

以上、『禽獸蟲魚草木考』には、特に後半部に、山本亡羊・榕室父子による加筆・訂正や草稿の整理がなされていると推察されることを述べた。写本『万葉集禽獸蟲魚草木考』は複数人の所説を含む、複数人の手になる書物である。

むすび

今日伝存している二つの本草学書、『湖魚考』・『万葉集禽獸蟲魚草木考』はいずれも複数人の手によって成立したものである。しかし、琵琶湖の魚貝類を調査し、それを一書にまとめたのはこの『湖魚考』がはじめであるという点で義兄の功績は大きく、日本博物学史上に残るものである。『湖魚考』序文の「付記」には「魚のくはしくいひおほせぬ有、是は一卷の生うつしにゆづりぬ」とあったが、『湖魚図』一卷は伝存しない。同じ近江彦根の藩士藤居重啓(文化十一年奉命)撰の『湖中産物図証』三卷(岩瀬文庫蔵)は山本榕室が嘉永七年(1854)に書写したものであるが、榕室による卷末の跋文には「此書蓋拠湖魚考而加潤飾者也」とある。『湖中産物図証』も実は「先図後文」というから、図が三卷、文が三卷、合わせて六卷あったらしい。しかし、それは義兄の『湖魚考』に準拠し、「潤飾」を加えただけだと述べている。義兄が先駆者であることを榕室も認めているのである。

『湖魚考』の成立後、義兄の「博物之学」に対する関心は深まり、九年後に『万葉集禽獸蟲魚草木考』が成立する。近世の万葉集の品物研究の集大成は、鹿持雅澄『万葉集古義』付録の『万葉集品物解』(五卷)とされる。この書と比較するに、義兄の書はさして遜色がない。分類において、義兄が草類に分類した十数種を雅澄は木類に分類し、魚類に分類した約十種を蟲類に分類している程度の相違があるに過ぎない。また、引用されている本草学関係の参考書にしても、『品物解』で圧倒的に多いのは『本草綱目啓蒙』(150回)、『和名本草』(96回)、『大和本草』(79回)で、二回以上引用されているものは、『康頼本草』、『医心方』、『本草綱目』、『本朝食鑑』などであるから、その種類は義兄の書に比してそんなに多いものではない。何より、雅澄は文献考証学者的色合いが濃いのに対して、義兄は観察を重視する自然科学者の傾向を有していたということである。 以上

(平成20年3月31日受理)